V．アブラハム

アブラハム以前の人々も神を真に信じており、祈りを捧げること、祭壇を築くことでその信仰を示していましたが、信仰の創始者と呼ばれるのはあくまでもアブラハムだけです。

聖書を見ても、「信仰」を持っている人々、すなわち「敬度な人々」が、アダムの子らやセツの子ら、エノクの子らやノアの子らと呼ばれている箇所は一つもありません。(自分たち自身によっても他の人々によっても)常に、「アブラハムの子ら」(例、ガラテヤ 3:6-9)と呼ばれているのです。アブラハムに続く世代のイスラエル人で神に祈っていた人々は、共通して、主に「アブラハムの神」と呼びかけているのです。

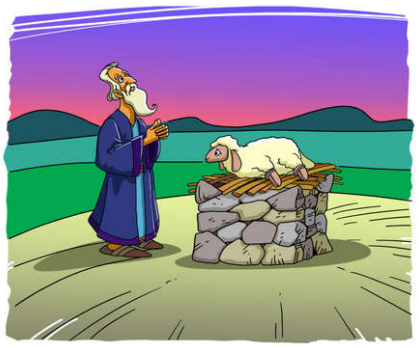
カルデヤのウルにおける考古学上の発掘からわかっていることは、アブラム(アブラハム)は若い時代を、非常に偶像礼拝的で物質的な文化で過ごしたということです。「ウル」という名前は、「光」という意味の語根から派生したものかもしれません。この町は(またの名を、さらに古い時代のシュメール人によればナンナと呼ばれる)月の神スィンに対する礼拝の拠点でした。これを見ると、アブラハムがまことの神をそこまで深く信じ、従うようになったのは、ますますもってすごいことだったとわかります。アブラハムの家系はセツにまでさかのぼります(創 11 章)。アブラハムの信仰は、「主の御名によって祈ること」を始めた時代と言われるセツの信仰が完全に花咲いたものと言えるかもしれません。

このように、一人の族長が、出自が微妙に疑わしいものであるにもかかわらず、信仰者としてここまで高く評価され、今日まで影響を与えるようになっているのはなぜでしょうか。理由として明らかなものは二つあります。すなわち、①主の御言葉に従順であったという点と、②公的な礼拝のため、そして主の御名を呼ぶために祭壇を築いたという点の二つです。この二つの理由から、アブラハムは、揺るぎない信仰の持ち主として、信仰の巨人とみなされるようになり、敬度な者たちの父となったのです。

祭壇の重要性

まずはアブラハムが主に祭壇を築いている箇所を見てみましょう。

> そのころ、主がアブラムに現われ、そして「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」と仰せられた。アブラムは自分に現われてくださった主のために、そこに祭壇を築いた。彼はそこからベテルの東にある山のほうに移動して…主のため、そこに祭壇を築き、主の御名によって祈った。(創世記 12:7-8)



> 彼は…旅を続けて、ベテルまで…来た。そこは彼が最初に築いた祭壇の場所である。その所でアブラムは、主の御名によって祈った。(創世記 13:3-4)

これら、祭壇を築いている例においてはいずれも、人間なる者たち(humanity)が神である方(divinity)と出会うことが期待されています。右に挙げた箇所を見てみましょう。アブラハムは、祭壇を築いた場所で「主の御名によって祈った」とありますが、これは彼が、祭壇を築く際に、神との特別な関係を持つための準備をしているということを意識していた、ということを示しています。アブラハムはヘブロンでも(創 13:18)、また、自分にとって最も忘れがたいモリヤの山でも、祭壇を築いています。「ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた」(創 22:9)。

主の言葉を聞き、祭壇で祈り、全能の神に信仰を示すことは、旧約聖書の語りにあっては切り離せないものとなっています。物理的に祭壇があっても超自然的存在への相応の信仰が伴わないということはあります。しかし、主の言葉を聞くこと(ローマ 10:17)なしに、かつ、神にお会いする場所を確保することなしに、まことの信仰があり得るかは疑わしい限りです。

アブラハムは神から「わたしの友」(イザヤ 4:8)とみなされています。友情のあるところ、親しい関係と交流が見られるものです。この素晴らしい族長の人生について学ぶにつけ、神との継続的で親密な関係を示す事柄の数々を見て、私たちは心を打たれます。この箇所における、神とアブラハムとのやりとりを見てみましょう。

> これらの出来事の後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」そこでアブラムは申し上げた。「神、主よ。私に何をお与えになるのですか。私にはまだ子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」さらに、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらないので、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう。」と申し上げた。すると、主のことばが彼に臨み、こう仰せられた。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」(創世記 15:1-4)

アブラムが九十九歳になったとき主はアブラムに現われ、こう仰せられた。「私は全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたをおびただしくふやそう。」アブラムは、ひれ伏した。神は彼に告げて仰せられた。「わたしは、この、わたしの契約をあなたと結ぶ。…」(創世記 17:1-3)

創世記 17 章のその後の節にあるアブラハムと神との交わりのしるしを見てみましょう。

「また、神はアブラハムに仰せられた。…」(15 節)
「そして、アブラハムは神に申し上げた。…」(18 節)
「すると神は仰せられた。…」(19 節)
「神はアブラハムと語り終えられると、彼から離れて上られた。」(22 節)

神との親しい交わりから溢れ出ているのが、ソドムとゴモラに対するアブラハムの熱心なとりなしです。彼は、神との間に、生きた関係を維持していたことから、神は、その二つの町についてのご自身の思いのたけを彼にお分かちになられたのでした。「主はこう考えられた。『わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。』」(創 18:17)。そして、この親密さのゆえに、アブラハムは強力なとりなし手となり

ました(創 18:23-33)。かくして、とりなしという行為が始まりました。これは、新約聖書の教えによって強化されている働きであり、それによって、神のしもべたちが今日も続けるところとなっている働きでもあります。

アブラハムが祈らなかったとき

アブラハムは信仰の人として絶対的な模範に相当する人ではありましたが、彼もまた人間としての自分の性質を重荷として負っていました。神との関係において素晴らしい高みに至ることができた、また、そのような高みに至ったにもかかわらず、一方で、祈っていなかった時には、失敗を犯す危険にさらされるのでした。自分の考えを正しいと思い込み、自分の持っているものに頼ったために、彼は一度ならずも失敗を犯しているのです。彼は、妻のサラとともに、神の約束を人間的な手段によって成就しようとします。次のようにある通りです。「サライはアブラムに言った。『…どうぞ、私の女奴隷のところにおはいりください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれるでしょう。』アブラムはサライの言うことを聞き入れた」(創 16:2)。この話の結果は、単にイシュマエルという子どもが産まれたというだけではありません。イスラエルの側にとって、とげとなる一つの子孫の流れの始まり(ガラテヤ 4:22-29 を参照)ともなったのです。

また、ゲラの王、アビメレクとの会見(創 20 章)に際しても、アブラハムは自分自身の判断に従って行動しています。彼は、考えはしましたが、祈りはしませんでした。妻のサラのことで恐れを抱き、彼女を妹と呼ぶことにしました。周囲を騙していたことが明らかになると、アブラハムは自分の行いを正当化します。「この地方には、神を恐れることが全くないので、人々が私の妻のゆえに、私を殺すと思ったからです」(創 20:11)。

アブラハムのこの愚かさと過ちは、この忠実な信仰の持ち主にしてはあまりにその人格から逸脱したものでしたが、彼はこれにより、アビメレクにとっての危険な状況を生み出すところとなってしまいます。「ところが、神は、夜、夢の中で、アビメレクのところに来られ、そして仰せられた。『あなたが召し入れた女のために、あなたは死ななければならない。あの女は夫のある身である』」(創 20:3)。

私たちは、神の思いを詳しく調べることもできなければ、神がなぜ、意図せずしてアブラハムの嘘の被害者となってしまったアビメレクをそこまで厳しくお取り扱いになったかを理解することもできません。しかし、少なくとも学ぶべきなのは、私たちは、祈らないことで、自分自身のみならず、何の非もない周囲の人々に対しても損失や危害をもたらすような一連の行いを選んでしまう可能性があるということです。アブラハムは、祈らないことで失敗してはしまいましたが、それ以上の過ちに身を任せることはありませんでした。すなわち、落ち込んで、その結果、祈ることをやめてしまったわけではありません。むしろ、彼は祈りの新しい次元を発見する機会を自らのものとしたのです。すなわち、いやしのための祈りです。そして、神が自分の訴えに耳を傾けてくださるということに気づいたのです。「そこで、アブラハムは神に祈った。神はアビメレクとその妻、および、はしためたちをいやされたので、彼らはまた子を産むようになった。主が、アブラハムの妻、サラのゆえに、アビメレクの家のすべての胎を堅く閉じておられたからである」(創 20:17-18)

第１章
族長たちとその時代の人々の祈り

アブラハム
祭壇の重要性
アブラハムが祈らなかったとき

Check!
○『聖書の祈りが私の祈りになる』（旧約編）　５７～６３ページ
○ 主な引用箇所　創世記12章7～8節、 13章3～4節、 15章1～4節、 17章1～3節、 16章2節、 20章

質問

1　アブラハムが信仰の創始者と呼ばれる理由として挙げられている２つのことは何ですか？（５８ページ参照）

2　アブラハムにとって祭壇を築くことはどんな重要な意味がありましたか？（５９ページ参照）私たちも同じ意味　を求めるとしたら、具体的に何をしたらよいと思いますか？

3　アブラハムがソドムとゴモラのために行なったとりなしはどこから生まれてきましたか？（６１ページ参照）私たちがアブラハムのようにとりなすためには何が必要だと思いますか？

4　アブラハムが祈らなかったために犯した失敗を２つ挙げて下さい。その失敗はどんな影響を及ぼすことになりましたか？（６２～６３ページ参照）

5　祈らなかったために失敗した後、アブラハムはどのような正しい行動をしましたか？（６３ページ参照）

6　今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？

祈り

主よ。私もアブラハムのように、毎日の生活で祭壇を築くことができますように。その結果、あなたと親しい関係が他の人へのとりなしにつながりますように。私が祈らないために失敗して、他の人を悩ませるようなことがありませんように。